



Title	茅盾小説論
Author(s)	是永, 駿
Citation	大阪大学, 2012, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59890
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【16】

氏名	是永駿
博士の専攻分野の名称	博士（言語文化学）
学位記番号	第 25619 号
学位授与年月日	平成 24 年 9 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文名	茅盾小説論
論文審査委員	(主査) 教授 青野 繁治 (副査) 教授 渡邊 克昭 教授 田中 仁 准教授 今泉 秀人 准教授 高階 早苗

論文内容の要旨

茅盾 (1896-1981) は、魯迅とともに二十世紀中国文学を代表する作家のひとりである。本研究は、茅盾の小説作品の文体分析を通してその作品世界を探究する作品論を主体に構成されている。本研究は、茅盾の小説文体の特徴、秦徳君手記と作品『虹』との関係、作品改作の持つ意味等について解析し、それらの解析を通して茅盾の小説言語とその方法を探究したものである。

茅盾の文体は長期にわたる作家活動のなかでしだいにその遠近法（パースペクティブ）を深めていくが、たくみな場景形成、錯綜する親属空間、プロットの漸層法的な展開をその主たる特徴とする。『蝕』三部作中の『動揺』（1928年）は、政治と性におけるカオス、人間のカオスの原点を描いて、茅盾の小説作品に通底する基質を生成した。長篇『子夜』（1933年）は中国社会の革命の展望を予言的に描いた点でカノンの位置を与えられてきたが、人間の内在的な主体性を蔑ろにし、ア・プリオリな観念を図式化したものにすぎない、との批判に晒され、没後その評価はゆらぎ始める。しかし、茅盾の「社会（政治）」と「性」との両面にわたるタブーとは無縁の意識は、現実を構造的にとらえる遠近法とともに、すぐれた構成力を見せて、独創性を失ってはいない。『子夜』をしのぐ構想のもとに執筆された長篇『霜葉紅似二月花』（1942年）は、作品空間を深める多元的な視点を駆使して圧倒的な語り（ナラティブ）の世界を生んでいるが、三十余年を経た1974年に茅盾は続編の執筆にとりかかる。その梗概、大綱、初稿には、冒険恋愛譚（ロマンス）への傾斜や、作家茅盾が封印してきた彼自身の政治や性意識の顕在化が見られ、茅盾の作家精神の基層を示唆して興味深い。

秦徳君は茅盾の日本亡命時代に行動を共にした女性である。茅盾没後、茅盾との日本での生活を記した回想記を発表、京都で同棲中に執筆された長篇『虹』が彼女の献身的な協力のもとに成った作品

であること等が明らかとなった。茅盾の回顧録『我走過的道路』は秦徳君に一言も触れていないが、双方の記述、何よりも作品『虹』の解説を通して、彼女が文学史に正当な位置を与えられてしかるべき存在であることを明らかにした。

茅盾は新中国成立後、要請に応じて旧作の改作に手を染める。版本考証は現代文学の場合も行われて当然であるので、『子夜』、『蝕』などについて校勘し、その異同を明らかにした。改作修訂のほとんどが愛欲描写や政治意識に関わるもので、過去の作品の改作が新中国における文学のメカニズムを逆に照らし出す結果になっている。

中国現代小説史において、その壮大な長篇を構想する茅盾の散文精神の強さは際立っている。その作品群と向かい合ううちに、茅盾が物語を仕組む遠近法がしだいに視野に立ち上ってくる。奥行きをそなえたフィクションとしての社会空間が読者の脳裏に現実のイリュージョンを生み、それが小説のリアリティーとなる。作家がとる視点や語り口そのものが作家に見えた現実を構成する一要素なのだと認識に立てば、文体（スタイル）を作品の内容と連動するものとしてとらえ、作家精神を探る媒体、いわば作家自身が培った内なるメディアとしてとらえ直すことも可能となる。叙述のスタイルと想像力との関係、表出された言語表現が指向するもの、それらがその作家の小説作品の特性、言語芸術としての特性ということになる。その視点に立つ本研究は、茅盾の小説作品に特徴的な社会を構造的にとらえる遠近法、秦徳君が絡む『虹』の成立過程、作品修訂の意識のゆらぎ等を、小説言語に即して解明したものである。茅盾の全体像としての作家論は、その苦難と栄光に満ちた生涯のあらゆるディテールに分け入り、全作品に徹底的な解析をほどこすことを通して浮かび上がるものとしてあるが、本研究はその全体像の核的部分を占めるものである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、日本の茅盾研究において、松井博光、桑島由美子らの先駆的著書に続く、数少ない茅盾研究の専著であり、小説テキストのち密な分析に基づく作品論を中心に据えたものとしては、初めての著作である。

論文の構成は、「序にかえて——カノンのゆらぎ」に始まり、Ⅰ 総論、Ⅱ 作品論 Ⅲ 或る「事実」 Ⅳ 作品の改作 Ⅴ 補論、という5つの部分からなり、最後に「解題・あとがき——茅盾研究をめぐる」が附されている。

「序にかえて——カノンのゆらぎ」は、1927年の小説「幻滅」の発表以来、中国リアリズム文学のカノンとして高く評価されてきた茅盾文学の地位が、中国社会の変化にともなって、ゆらいでいること、だからこそ多様な読みや研究が期待されることを述べる。作家像そのものの修正（回想録に触れられなかった女性関係）も含めて、解き明かされていないことの多いことも指摘し、「茅盾の個がどった苦難と栄光のプロセスこそが、私たちを探求へと誘う創造的な世界として広がっている」と執筆の動機をまとめている。

Ⅰ 総論

この節は、「スタイルの中国現代文学史」と「茅盾の小説言語と文学の方法」の2章からなる。前者は本論文の基本的な方法論の提示であり、「何よりも言語表現に着目して小説史を構想しようとするものである」としているが、それは小説史のみならず、茅盾という作家の小説分析においても貫かれる手法である。「呉遜甫をはじめその人間群の存在感、奥行きをそなえた社会空間が読者の脳裏に現実のイリュージョンを生む、そちらの方にこそ小説のもつリアリティーの秘密が隠されている、それが小説の面白さ」であるとし、また、「作品が新しい読みに開かれているということ、それだけの深さと構造をそなえていることが時代を超えて輝く要因となる」と述べ、『子夜』の人間群を描く全体小説としての遠近法のスタイルにしても、カノンの揺らぎを呈しつつも、その小説としての構成力は、1930年代の社会派小説という年代記的な位置づけを超えて今もなお我々読者に奥行きのある遠近法を送り届けてくれる」という。かくて「本論が求める文学史にあつては、個々の作品の読みが内なるメディアであるスタイルの解明を通して、作家精神の索引という文化史的文学史へと収斂していく」という本論文の基本的視点が示される。

「茅盾の小説言語と文学の方法」は、この方法論を茅盾の小説に適用した場合の、総括的意味合いをもち、「語用の多義性」、「小説言語」におけるパノラマ様式の視点とフィクションとノンフィクションをないまぜにして包容するユニークな構造を形成する点、「紅樓夢」ばりといわれる作中人物の登場の仕方と視点の移動による物語展開を茅盾の小説の特徴として挙げている。

Ⅱ 作品論

この節では、まず初期の傑作である『動揺』、日本亡命期の作品『虹』、帰国後の『子夜』および「農村三部作」、日本で先行発表された「水藻行」、日記体の長編小説『腐蝕』、『紅樓夢』の伝統を踏まえた『霜葉紅似二月花』とその続稿、そして幻の作品とされていた『走上崗位』およびその類似作品である『第一階段の故事』、『鍛錬』を論じている。

「『動揺』論」の論点は主に、三つある。ひとつは多義的な読みの可能性で、作品に頻繁に現れる女性の乳房に対する執拗とも思える描写が、扇情的な意味合いの陰に、当時の中国女性の「胸の解放」の議論があったことの指摘であり、また「自由恋愛」という言葉が、モラルの混沌を背景にして「即席恋愛」から「複数恋愛」「性的野合」「姦通」へ広がる多義性を有していたこと、「謠言（デマ）」が単なる軽薄なデマではなく「暴力的装置」として機能している、ことなどを指摘する。ふたつめに、中国古代の「稗官」のように、眼前の事象に執着し記録し、その意味を問い続けようとする作家意識の存在がある。その意識の下に描きだされる作品世界が「史詩（＝長編叙事詩）」となるのは必然である、とする。第三点は、果てしない動揺と、完結せる悪とを二人の人物（方羅蘭と胡国光）に形象化しえたことを挙げている。

「『虹』論」では、Ⅲ節の「ある「事実」」を踏まえて、作品のモデルの胡蘭畦、その資料の提供者としての秦徳君の存在を前提として論を立てているが、秦徳君も茅盾も自らの体験をオーバーラップさせているとすれば、『虹』を単純な「モデル」小説ということが難しいと指摘、『虹』が獲得した「写実性」は、作者が自己の実存的存在をそのなかに据えることによって成り立つ「写実主義」に由来する、と論ずる。秦徳君の提供した資料にない上海の場面で、茅盾本来の状況（場景）形成の手法があらわれる、という分析は、「虹」における秦徳君の役割をよく示す指摘である。

「茅盾文学における幻想と現実」の章では、おもに『子夜』および「農村三部作」を論じ、茅盾文学の文体的特徴を細やかに分析する。茅盾の文体には一人称による私小説的な発想を拒むような核があること、ある情況が行動あるいは視覚・聴覚の働きによって展開され、その展開から心理へと、「外から内へ」心理をくくってしまう構造を有すること、そのような情況形成において作者を対象をみつめる距離が生まれ、その距離感によって、作家の感覚のリアリティーが生まれ、「革命」自身をも対象化する、この文学者としてのしたたかさが、彼を内面から支え、幻想からの脱皮を容易にしたのだとする。

「『水藻行』論」は、この作品を「中国農民の樂天的でたくましい生活感、とくに性のモラルに焦点をあてた異色作」ととらえ、パールバックの「大地」の主人公王龍と比較しながら、秀生夫婦と伯父にあたる財蓄との開放的な性のモラルに、束縛を突き抜ける開放性、予見を潜めたりリアリティーを読み解いている。

「『腐蝕』の文体と構造」では、「茅盾の作品には、その時代の歴史的事実をも小説（フィクション）の中の情況を形成する情報の一部としてとりこむという、ある種の無原則性が見られる。」とし、「彼の作品の状況の中でこれらの事実はかえってフィクションを活性化する働きをしている。」とし、「茅盾作品の虚構性の核心はおそらくそこに求めうる」。日記形式をとった『腐蝕』の視点は一人称へすっきり転換したのではなく、三人称全知と一人称が混在しているが、それを可能としたのは、「状況の連鎖」を根幹とする茅盾の小説の手法であり、中国的な心理小説として先駆性を帯びてくる、と指摘する。

「『霜葉紅似二月花』続稿の世界」では、1942年発表の未完作品『霜葉紅似二月花』と文化大革命中ひそかに執筆に従事したその「続稿」を分析することにより、茅盾が「続稿」執筆に際して解き放った封印の存在を指摘し、それまでの小説で描かれることのない脱党、日本亡命、同棲、離婚（騒動）などを解禁することによって、自らの執筆意識を完結させようとする茅盾の最後の姿を見る。

「茅盾作品中における『走上崗位』（持ち場につく）は、他の『第一階段の故事』や『鍛錬』

と同じく、日中戦争における上海から武漢、重慶への工場移転を扱った作品であるが、とくに『鍛錬』との共通点が多く、独立した作品と言えるかが問題となっていたが、日本で陽の目を見た版本によって、『鍛錬』とつづぎに比較し、両者を別の作品として読むことができる可能性を人物像や時間軸のずれという視点から実証したもので、いわば『走上崗位』の登場によって、茅盾が描こうとした中華民国史の全体像におけるミッシングリンクが完結したのだと指摘する。

Ⅲ 或る「事実」

この節は、「茅盾文学の光と影」「回想の茅盾」の2章からなり、前者は茅盾の日本亡命に同行した女性秦徳君が茅盾の死後書いた回想録および秦徳君自身へのインタビューをもとに、これまでの茅盾研究の空白や問題点について考察したレポートであり、後者はそのインタビューの記録である。茅盾も秦徳君も亡き今となっては、貴重な記録となっている。Ⅱ節の「『虹』論」は、この資料と考察に負うところが大きい。

Ⅳ 作品の改作

茅盾はテキストの異動の多い作家であり、とくに1950年代において、大幅な改作と削除が行われている。ここでは、茅盾の作品のなかで、とくに大幅な改作が行われた『子夜』と『蝕』について、旧版、新版を一字一句比較してその異動を表にし、改題を加えたもので、特にⅡ節における作品分析の基礎となった地道で着実な作業である。

Ⅴ 補論

「茅盾の自然主義受容と文学研究会」と題して、Ⅰ～Ⅱで展開したような茅盾的なりアリズムの創作方法がいかに形成されたのか、とくにフランス自然主義におけるゾライズムの批判的な受容を中心に論述する。

改題・あとがき——茅盾研究をめぐって

最後に日本、北米における茅盾研究を概観し、茅盾研究の全体像の見取り図を提示して論を終えている。

以上のように、この論文は、版本比較というような地道な基礎作業に基づく緻密な文学テキストの読み込み、そして時代状況の的確な把握という、いずれも困難かつ膨大な作業を伴う研究の上に、中国・日本・北米における茅盾研究の状況を踏まえつつ成立した労作である。とくにその中心に位置する作品論においては、茅盾という作家の言語および作家意識の分析を通して、その小説作品の特徴をとらえているばかりでなく、そこから示される読みの地平は、独創的な見解に満ちており、中国本土でカノンとして揺らいでいる茅盾文学に対して、新しい世界文学的評価の可能性を問う意欲作である。

よって、審査委員会は全員一致で、本論文が博士号授与にふさわしいものである、という結論に達した。